

土佐方言サ行子音と上代サ行子音

山田幸宏

要 旨

土佐方言の音声的特徴を概観したのち(第1章)、土佐のサ行子音には破擦音と摩擦音([ts], [dz]; [θ], [ð]; [s], [z])が認められること(第2章)、採集中村方言では破擦音を本体とすること、破擦音であっても、イ段、ウ段のタ行子音とは弁別されていること(第3章)、つぎに、『日本言語地図』と他の文献資料にみられる土佐のサ行子音の検討を試み、破擦音との関連(第4章)、さいごの史的考察では、上代サ行子音の破擦音説、中世の破擦音説、現代中村方言をその典型とする土佐方言の破擦音、現代日本語諸方言の破擦音等の検討(第5章)を示した。結論として、土佐の破擦音は日本語音韻史の中に位置づけられ、上代サ行子音の破擦音であった可能性を支持する例証であるとした。

1. 土佐方言音

土佐方言(高知方言に同じ)の音声的特徴を概観しておくことは、土佐のサ行子音(特に断わらない限り、その有声音も含む)を考察する上で有益であろう。

土佐方言は主として高さアクセントの差異により、東言葉と西言葉に大別される。京阪式(甲種)に属する東言葉の地域は、東は室戸から西は高岡郡東津野村、大野見村、窪川町、幡多郡佐賀町を含む南北の線までであり、東京式(乙種)に属する西言葉は、この線^{注1}以西の中村市、宿毛市、土佐清水市を含む幡多地方である。

音韻体系として、東京方言などと異なる点は、イ段、ウ段で /z/ と /d/ (ジ:ヂ, ズ:ヅ)を音韻的に区別する所謂四つ仮名のあることが挙げられるが、若年層は、殆どが、これを失ってしまっている。区別の例としては /huzi/(富士) と /hudi/(藤)、/zisi/(自身) と /disi/(地震)、/mizu/(見ず) と /midu/(水) などである。^{注2}

タ行子音は、上歯の裏と歯茎の境目あたりで調音され、イ段、そして、特にウ段の子音は摩擦が少なく、時に破裂音になることさえある。たとえば /midu/(水) は [mi-d^hu], [mi^h-du], [mi^h-do] などと、また、/kutu/(靴) は [kut^hu], [kutu] などと発音される。他の段では破裂の [t], [d] 音である。

その他、サ行子音とは直接関係しないが、語頭および語中の有聲破裂音 /d/, /g/ の微量の前鼻音化現象、母音、半母音の前や語末の「ン」が [ŋ] であること、東言葉では、所謂狭母音の無声化のないことなどが挙げられる。^{注3}

(2) 土佐方言サ行子音と上代サ行子音

2. 土佐方言サ行子音

今日広く聞かれる土佐のサ行子音は舌尖が上前歯の裏中程、あるいは、それより前寄りに近づいて作る摩擦音で、[θ] の記号を以って表わすことができる。ア段、オ段では典型的な [θ] を示すことが多い。イ段で口蓋化した子音となることは、他の多くの日本語方言の場合と同様である。有声音は無声摩擦音に並行した音であると言ってよい。この [θ]、[ð] 音は、話者の世代によって異なりがあり、とくに若年層には、これを失う傾向が見られる。舌端で調音される [s]、[z] に向う変化ではあるが、詳細に観察すれば、やはり、舌尖に近い部分を用いての調音であることは注目に値する。

ところで、破擦音の [ʃ]、[ʒ] がサ行子音として現われることが、可成り多くの話者に観察される。しかし、同一語が他の場合に同一話者によって摩擦音で実現されることも多いし、あらためて質せば、多くは摩擦音に「戻って」発音される傾向のものである。例えば、「コンガスリ」の「ス」、「ソーデス」の「ソ」などの子音が [ʃ] に、また、「ナゼカ」の「ゼ」などの子音が [ʒ] になる場合である。これらの破擦音は上前歯の裏中程、あるいは、それより少し前寄りに舌尖が軽く触れて形成され、この調音から舌尖の軽い接触（破裂）を取り除くと [θ] になる音である。したがって、[ʃ]、[ʒ] と、[θ]、[ð] との差は調音上ごく僅かである。この軽い破擦音は破裂の部分の消滅する寸前の、淡い残照のようなものである。音韻本体の姿としては摩擦音であろう。

このように、現代の土佐方言におけるサ行子音には、調音体および調音点がほぼ同じで、調音法を異にした三種の音声を認めることができた。つまり、[s]、[θ]、[ʃ]（それに、対応する有声音）である。そして、[s] は、より若い世代に、より市街地に、[ʃ] は、より高年齢層に、より郡部山間部に多い。

3. 採集土佐中村方言サ行子音

1982年4月に、サ行子音として破擦音を顕著に示す中村方言（百笑の南・四万十川橋の東袂の地域）の談話資料を蒐集した。この音声の特徴は次のようなものである。サ行子音は摩擦音で実現される場合もあるが、破擦音である頻度が圧倒的に高い。注意深い発音では破擦音になり、時には破裂音かと思われるほど摩擦の少ないものもあるくらいである。したがって、サ行子音音素本来の姿としては破擦音とすべきであろう。

分布の上からみると、イ段で口蓋化するものは、他の多くの日本語方言の場合と同様である。「ソコワ」とか、「デス」など、息の段落の前後、つまり文節の始めや終りの部分に摩擦のサ行子音の現われる傾向がある。この摩擦音は今日の土佐方言一般にみられる [θ] と同じものである。

この話者の破擦音は第2章で触れた軽い破裂に導かれる破擦音よりは安定した姿をしていると言える。詳細に観察すると、イ段、ウ段では摩擦が多く、[tʃ]、[tʃ]、ア段、エ段、オ段のサ行子音は摩擦が相対的に少なく [tʃ] と表記できよう。有声音の場合も、これと並行している。一方、タ行子音は、イ段、ウ段で摩擦が僅かではあるが有り ([tʃ]、[tʃ])、ア段、エ段、オ段では、破裂音 ([tʃ]) である。したがって、サ行子音とタ行子音との距離

は各段ともに等しく保たれ、サ行子音は、いずれの段でもタ行子音より摩擦が大であって、この摩擦の量の差が弁別特徴になっている。これは機能負担の原則からもうなずける。

採集中村方言の録音資料の一部を参考までに示してみよう。

kamit^humija ano dan^hteino tokojanokotoo kamit^humija ara god^hon^hd^hzigo^ho^haima-
カミツミヤ、アノ ダンセイノ トコヤノコトオ カミツミヤ。アラ ゴゾンジゴザイマ
t^hen^hde^hta a: t^ho:~de^hsu: ano t^horewane tot^hano ho:~ge^hnni ju:bene jo^hçimura-
センデシタ。アー ソーデスー。アノ ソレワネ トサノ ホーゲンニ ユーベネ ヨシムラ
t^hen^hsei^hni kikima^hit^harane tot^hano ho:~ge^hnnimone kamit^humijawa t^hen^ht^hei detei-
センセイニ キキマシタラネ、トサノ ホーゲンニモネ カミツミヤワ センセイ デテイ
rujo: ju:tene mo:çima^hit^htajo hai
ルユーテネ モーシマシタヨ。ハイ。

kamit^humijawane wata^hça korewa tot^hakotoba^hd^hça:nai^hndetsykato ota^hd^hune^hit^ha-
カミツミヤワネ、ワタシャ、コレワ トサコトバヂャーナインデスカト オタヅネシタ
ndetsujo ju:bene hoitara kamit^humijawa boku^hga iroiro ho^hjo çirabetara
ンデスヨ、ユーベネ。ホイタラ カミツミヤワ ボクガ イロイロ ホンオ シラベタラ
deteoru it:e ima^hta ho^hnnimo e t^horekara ma: kjo:wa amega Φu-
デテオル イッテ イマシタ、ホンニモ、エ。ソレカラ マー キョーワ アメガ フ
t^h:oru oma^hta^h kat^ha: mot:ekitakaja jo:it^hç^horukai to ko:ju:jo:-
ツ Chol, オマサン カサー モツキタカヤ、ヨーイシ Cholカイ ト コーユーヨー
ni iimatsukotomo wata^hit^hdomo joku ki:teorima^hujo
ニ イイマスコトモ ワタシドモ ヨク キーテオリマスヨ。

4. 文献にみる土佐方言サ行子音

現代の土佐方言に現われるサ行子音の音声的特徴を概観してきたが、文献では、この実態がどのように記述されてきたのであろうか。

国立国語研究所編『日本言語地図』、第1巻(以下『地図』と略す)の第7図から第10図までが、「セ」と「ゼ」の子音の種類とその地理的分布を示している^{注8}。

『地図』第7図「セナカ」(背中)の「セ」については、[s]が全国的な分布を見せるが、[θ]は高知県に18地点、大分県、奈良県、三重県に各1地点ある。高知県内の残り6調査地点では[s]を示している。高知県は[θ]の際立って優勢な地域として注目される。『地図』第8図「アセ」(汗)の「セ」についても、[θ]はほぼ同様の分布を示し、高知県に17地点、大分県、奈良県に各1地点ある。

『地図』第9図「ゼイキン」(税金)の「ゼ」については、[z]、[dz]、[d]が全国的に優勢である中で、[ð]は高知県にのみ1地点認められる。これは前述の無声子音[θ]の分布と比較して、大きな相違を示している。また、高知県には、[d^hz]が1地点、[z]と[d]の共起するのが1地点、残り21地点が[z]である。『地図』第10図「カゼ」(風)の「ゼ」については、[ð]の起る地点が高知県に2地点、大分県に[z]と共起する1地点があるのみである。高知県の大半の21地点は[z]、残る1地点は[d^hz]である^{注9}。

『地図』上記4図の示す限り、高知県では、サ行子音として摩擦音[θ]、[z](または

(4) 土佐方言サ行子音と上代サ行子音

[θ]が顕著にみられるが、破擦音の [ts] は皆無であり、[dʒ] は2地点のみである。

つぎに、土佐方言について書かれた研究書や報告で、サ行子音がどう記述されているかを見てみたい。比較的に共通して見られるのが、東京方言のそれより前寄りの調音であるという意味の説明と、それを [θ] で表記している場合である。^{注10}ただ、有声音の場合、[θ] と表記するものの少ないのは注意を惹く。^{注11}[ts]、[dʒ] と記述したものは、研究書には今のところ藤原(1974)以外に見当たらない。^{注12}したがって、音声としては、[θ]、[z] であるというものが広く行なわれている観察報告であると言える。

文献資料の中にサ行とタ行の「交替」、あるいは、これと同様の主旨の記述が可成り見受けられ、これが、この論考のテーマと深くかかわっていると思われる。それは、交替として挙げられている例の中の相当数の語が実は交替ではなく、音韻論的には観察の時点で依然としてサ行子音であったのではないかと考えられるからである。勿論、音素のレベルでのサ行子音とタ行子音の真の交替も中にあるであろう。しかし、仮名で書かれたりしている限り、その判断はもはや不可能である。

文献にみる限り、サ行からタ行への交替が圧倒的に多く、その逆は極く僅かである。これは興味深い現象である。「キサナイ」(汚い)、「マスケ」(睫毛)、「カラザ」(身体)、「ナゼル」(撫でる) というようなタ行からサ行への交替は語彙的に音素の転換の起ったことが容易に認められるが、一方、「トタ」(土佐)、「トーデツ」(そうです)、「マデル」(混ぜる)、「ワリダン」(割算) というようなサ行からタ行への交替として記されているものは再考を要する。すなわち、それは音素の転換、つまり交替ではなく、サ行子音の域内にありながら、音声として破裂の [t]、あるいは [d] を先行させている破擦音であるために、タ行子音と受けとられたのではないかと考えられるからである。

つまり、今日の土佐方言の話者の多くが、また、日本の諸方言の話者がサ行子音に摩擦音を持っているために、破擦音のサ行子音を耳にしたときにタ行子音に聞くのは、むしろ自然な反応なのである。このような反応が生ずるには二つの場合が考えられる。一つは母語が土佐方言でない人の場合、^{注13}二つには、土佐方言を母語とはするが、サ行子音が摩擦音の人(大多数)、あるいは、摩擦のサ行子音に規範を求めようとする立場の人の場合である。^{注15}

サ行子音をタ行子音に発音するという、この種の「交替」が幼稚園児や小学校低学年の児童に多く認められるという。これは、とりもなおさず、幼少の者ほど生活の場での言語を、そのままの姿(サ行破擦子音)で学校に持ち込めたということである。それが高学年になるにつれて、学校教育の中で公然と、あるいは暗黙のうちに「矯正」されていったのであろう。

5. 史的考察——上代・中世・現代

上代サ行子音の音価推定については、大きく破擦音説と摩擦音説との対立があり、文献並びに方言資料に支えられ一定の結論に至っているハ行子音の場合とは異なって、定説を得る段階に達しているとは未だ言い難い。

有坂(1969)は万葉仮名などにおける漢字使用、朝鮮及びシナ資料の精緻な研究から、サ行子音は奈良時代より更に「ずっと古い時代には〔各段のサ行音は〕かつて皆アフリカータに始まるものであったことが可能である」として、本来、破擦音であったと推定して^{注16}いたことが、^{注17}うかがえる。

サ行子音の上代、あるいは、それ以前における音価について定説を得るには未だ資料、考察の点で補うべきものがある。有坂の用いた資料は当時の限られた中央のことばであったと思われる。地方のことばは防人の歌などを含めても資料としては少ない。時代が下るに従って文献資料は増加するわけであるが、漢字の使用法が日本語になじんでくると、仮名も発達してきて、文字は、音韻記号としての機能はよく果すが、実際の音声は表わさなくなる。したがって、音声の実態を、今日、より正確に把握するための有力な手段としては、第一に漢字・仮名によらない文献、日本語以外の言語をもった耳による観察記録、即ち、外国人による日本語の記述を、そして第二には、現代の日本語諸方言の姿を音声学的に記述した資料を利用することであろう。その点を少し検討することにする。

中世には、ポルトガル人の残した資料があり、それを手がかりにすれば、中世のサ行子音の音価がより事実近くに推定できる筈である。丸山(1981)はポルトガル語、スペイン語の音韻史を考慮に入れることによって、ロドリゲスの残した日本文典の説明書きを解釈し直し、中世日本語サ行子音の破擦音であった可能性を否定し難いものであるとの結論を示した。^{注18}

ところで、Blair and Robertson(1903—1909)は17世紀初頭のスペイン資料として土佐の地名を残している。その一つの例が‘Toça’^{注19}(土佐)と綴られているものである。当時のスペイン語のçは破擦音と考えられるところから、土佐でスペイン人の耳にした‘Toça’のçも破擦音[ts]、または、[ʃ]と解釈され、今日の土佐方言のサ行子音に破擦音のある事実を歴史的音声変化の過程の中でとらえることのできる有力な資料であると言わねばなるまい。^{注21}これは、同時にロドリゲスの記述を破擦音と解釈することの正当性を、このスペイン資料が証しているのである。

つぎに、現代日本語諸方言のサ行子音について触れたい。土佐サ行子音については上述の如く破擦音の現存することが明らかになった。東京方言における「サ」、「ス」、「セ」、「ソ」の子音[s]は上歯茎の前部と舌端とで調音され、「シ」の子音は口蓋化を伴う。有声音の場合、母音に先立たなければ、破擦音[dz]、[dʒ]、母音間では摩擦音[z]、[ʒ]になる傾向である。この有聲の破擦音と摩擦音は相補分布をなし音韻的な対立はない。但し、イ段、ウ段のタ行有聲子音とサ行有聲子音は音韻的な対立を失っている。このように、音声的なレベルとは言え、東京方言のサ行有聲子音に破擦音の存在している事実は、日本語のサ行子音が、かつて破擦音であったとする説にひとつの材料を提供していると言えよう。

現代のサ行子音についての資料としては『日本語語地図』が有益であろう。第1巻の第7, 8, 9, 10図をみる限り、サ行無聲子音については破擦音、破裂音は全国に1地点もない。その反面、有聲子音の破擦音、破裂音は地域的な偏りを見せながら、摩擦音[z]とともに全国的に広く分布している。また、第1巻・第42図には「オソロシイ」(恐しい)の

(6) 土佐方言サ行子音と上代サ行子音

「ソ」の子音に[t]を用いるところとして、九州西半および南部、奄美大島以南、四国、和歌山県、石川県、富山県を挙げている。^{注22}このように、サ行子音については、破擦音や破裂音が諸地域に現実に存在していることを知るのである。

その他の方言資料からサ行子音の破擦音、あるいは破裂音の例を少し拾ってみよう。サ行無声子音に破擦音あるいは破裂音の対応する例は比較的少ない。宮良(1982)によれば、福江に[çigat] (東)、福江、指宿に[tot] (年)、^{トツ}白保に[patsi] (橋)、糸満に[itʃi] (石)、^{トツカ}笹子に[totsaga] (鶏冠)、大館に[matsi-katʃa] (松笠) などがある。^{注23}

サ行有声子音の例は無声子音の破擦音、破裂音の例よりはるかに多いことは『地図』の資料や、東京方言について述べたところで既に見た通りである。それ以外の例として、荒浜に[nidzi] (虹)、首里、那覇、嘉手に[nu:dʒi] (虹)、^{注23}首里に[kidzi] (傷)、八重山郡石垣町に[kidzi] (傷)、[kidzamuŋ] (刻む) などがある。^{注24}服部(1932)は「喜界ヶ島阿伝方言で標準語の「ザズゼ」に当る音節が[da du di] であるのも注意をひく」と述べている。宮良(1980)は「鼠」の「ズ」の子音が[d] あるいは[dz] の例を鹿児島、沖縄から挙げている。^{注25}

所謂、幼児語(「チロイ」(白い) など)には、サ行子音に対応する音を破擦音にする例が多いが、ここにも曾てのサ行子音の姿を垣間見ることができるのではないかと考える。^{注26}

以上の例からも、日本の諸方言に破擦音の例が更に多く存在する可能性は充分にあり、可成り近い過去まで、諸方言に破擦のサ行子音の存続した蓋然性も高いと想像される。

おわりに

上代のサ行子音が破擦音であったとする有力な有坂説があり、キリシタン資料などに残る記述が中世においても尚破擦音が行なわれていた可能性を示唆しており、また、今日の方言資料からもサ行子音の破擦音である例が可成り多く求められ、しかも、土佐方言のサ行子音が広く[θ], [ð] を、そして時に[ʃ], [dʒ] を使用し、就中、採集土佐中村方言で破擦音が典型的に用いられているのを知るとき、サ行子音は上代から現代に至る日本語の音韻史の中で、その変化の度合は方言による遅速の差を許しながら、[ts] から[ʃ], [θ], [s] へと変化してきたと言えるし、土佐方言における破擦音が突然変異として孤立して存在するのではなく、日本語のサ行子音の変遷史の一端を担い、有坂説を支持する材料として位置づけられるのである。

〔附言〕 高知医科大学教授江草清子氏、高知大学学生道倉由美子氏は中村方言の話者有澤梅窓氏を紹介下さった。埼玉大学教授柴田武氏には資料となった中村方言の録音テープを聞いていただき有益な助言をいただいた。高知大学名誉教授土居重俊氏、同・吉野忠氏には土佐方言について過去十数年に亘って種々御教示いただいた。資料提供者の有澤氏は全面的に協力下さった。諸氏に深甚の謝意を表したい。

なお、本稿は1982年6月20日愛媛大学において開催された四国英語教育学会で報告した「土佐サ行子音と英語音」を大幅に発展させたものである。

- 注1 土居 (1958) pp. 13-15, 土居 (1979) p. 129, 土居 (1982) pp. 3-4, 12-14, 浜田 (1982) pp. 42-54。
- 注2 四つ仮名崩壊の時間的推移については土居 (1958) pp. 40-50, 土居 (1970) pp. 21-30, 土居 (1982) pp. 6-10, 浜田 (1982) pp. 54-55を参照。また音声的特徴については, 土居 (1958) pp. 31-103, 柴田 (1960) pp. 3-6, 柴田 (1962) pp. 2-5を参照。
四つ仮名の崩れて行く過程を, 1962年7月の調査で, 30歳代後半から40歳代前半の人びとに, 「水」について見る事ができた。本来の /midu/ は農耕用などの自然の水を意味する時に用いられ, 飲み水の意味で言う時には /mizu/ となりサ行子音になっている。学校で「水」は [mizu] だと教えこまれたものだと回想した人もいた。このように /midu/ と /mizu/ を使い分けているが, これはすべて /mizu/ で言い表わすようになる前の段階であろう。この点については, 更に詳細な調査が必要である。
- 注3 土佐方言は, 音声面ばかりでなく, 語彙, 統語論, 意味論などの面においても, 日本語の古い形をとどめていると指摘されている。土居 (1974) pp. 98-107, 竹村 (1977) pp. 277-287, 東辻 (1981) pp. 17-33, 浜田 (1982) pp. 54-55, 他, など参照。
- 注4 服部 (1957, p. 95) は土佐方言の「土佐」を [toθa] と表記し, イェスペルセンの非字母記号の β^2 を当てている。また服部 (1931, p. 6) は「風」等は無雑作な発音では, [kaðe] と聞える」としている。
- 注5 1982年6月から9月にかけて, 生活の中で気のついた例は, 語数にして二十数語, 人数にして十数人である。「シ」, 「ゼ」, 「サ」, 「ス」, 「ソ」, 「ザ」の順で多かった。話者名と語例は割愛する。1人で6~7語も出る事例もあった。高知県全域から, この程度の例は容易に求められると思われる。また, このような例が破擦音であるために, タ行子音と受けとられたり, 「交替」として記述されることについては, 第4章を参照されたい。
- 注6 話者は有澤梅雄氏, 雅号梅窓。明治32年幡多郡中村町西町築地(旧地名)生れ。県華道協和会理事長, 小原流本部理事。女学校まで中村在住。結婚後3年間東京在住ののち高知市に戻る。1982年4月7日高知市上町の有澤氏宅で録音。話者は落ち着いた, しっかりした話し方で, 質問に対しては充分な量の話をされる。発音上で特に取り上げるべき個人的な特徴はない。問題のサ行子音については, 何も意識されていないし, 談話の流れの中でごく自然に発音されている。
- 注7 「カサ」(傘)のサ行子音は [ʔ] で, [ʃ] や [ts] ではない。したがって音声的には [kata] (肩) に非常に近いが, たとえわずかであっても, 摩擦のあることが, タ行子音との弁別に寄与している。これが歴史的にサ行子音をして破擦音から摩擦音へと, その変化の軸を向けさせたのであろう。
- 注8 これはサ行子音の口蓋性を調査目標としたところから, 母音全段におけるサ行子音については知ることができないが, 少なくとも, その一部は知り得る。
- 注9 「ゼイキン」, 「カゼ」については, 高知県の殆どの調査地点で, [ʒ] が記録されている。この音声的性格は, 第2章第1節で述べたことから, [ð] に近い [ʒ] であると考えられ, 結果として, 『地図』第7図, 第8図の [θ] の分布とも一致することになる。また, 第9図, 第10図に [ʒ] が, それぞれ1地点あるが, 第10図の語中の [ʒ] は, とくに注目すべき報告である(注12参照)。この地点は, サ行子音に破擦音を顕著にもつ上述の中村方言の話される中村市の境から南へ5~6km 離れた土佐清水市下の加江町である。

(8) 土佐方言サ行子音と上代サ行子音

- 注10 「前寄り」については、岩淵 (1930) p. 9, 土居 (1958) pp. 32-33, 山崎 (1961) p. 374, 注4, 土居 (1982) p. 5 など, また, [θ] については, 服部 (1957) p. 95, 土居 (1958) p. 33, 山崎 (1961) p. 374, 注5, 日本放送協会 (1967) p. 17 など参照。
- 注11 注4, 『地図』第9図, 第10図参照。
- 注12 藤原 (1974, p. 5) は高知県須崎市旧浦の内村の「ミゾイ」[midzoi] (短い) を報告している。
- 注13 土居 (1958) pp. 80-82, 山田 (1982)。
- 注14 佐藤 (1934) p. 33, 土居 (1958) p. 33 参照。
- 注15 宮田 (1936) p. 12, 土居 (1958) pp. 33, 81-82 参照。児童の間にこの傾向が多く, 「気になる」, あるいは「気になったものだ」という話は耳にする。土居 (1962, pp. 125-127) の教育現場での生の報告は興味深い。
- 注16 有坂 (1969) p. 485。
- 注17 上代サ行子音については, 従来, 馬淵 (1968, pp. 111-112) などの批判を受けながらも, 破擦音説が有力視されてきた (橋本 (1950) p. 68, 有坂 (1969) p. 158, 服部 (1960) p. 300, 亀井 (1970), 築島 (1980) p. 791, 中本 (1981) pp. 70-71)。しかし, 亀井 (1980, p. 95) の指摘する如く, 必要とされる日本諸方言からの資料の裏づけができないままだった。この点, 採集中村方言は, この空白を一部埋めるものであろう。
- 注18 この時代にイ段, ウ段のタ行子音が, すでに今日の如く破擦音化していたとしても, 破擦のサ行子音とは摩擦の量の差で弁別していたであろう。このことは採集中村方言が証明している。
- 注19 Blair and Robertson (1903-1909) は, 1493年以降1898年までのスペイン資料を55巻に英訳したもので, 地名, 人名は原綴りを用いている。土佐のサ行子音に関する例として, Toça という綴字は第12巻 p. 77 (1601~1602年の資料) と, 第15巻 p. 118 (1609年の資料) にある。また, 第12巻, 第15巻の他所に Toca (1609年), Toza (1609年), Tosse (1603年) がある。「清水」(土佐の) がモルガ著『フィリピン諸島誌』(Blair and Robertson, 第15巻の日本語訳, p. 233, 注(5)) に Çiminzu と綴られているのも資料となろう。土佐以外の地域の固有名詞で参考になる例を一部列挙しておく。「薩摩」Zazuma (1609年), 「長崎」Nangaçaqui (年不明), Nangazaqui (1626年), Nangaciqui (1626), Nangoza (1640年), 「太閤様」Tayçoçama (1637年)。これらの例については, 実際に誰が何処で誰に聞いたかなどの詳細な考証が必要であるが, それは後日に譲りたい。
- 注20 亀井 (1970), 丸山 (1981) 参照。
- 注21 現代土佐方言の [θ] と現代スペイン語の [θ] が, 共に [ts] から変化した音である点, 音声変化のひとつの共通性を示していて興味深い。
- 注22 但し, 第42図では「オソロシイ」を「恐しい」以外の意味に使っている地点があったとしても地図には表われず, 従って本文で言及した地域以外には「オソロシイ」の「ソ」の子音が破擦音, 破裂音ではないと言い切ることはできない。
- 注23 宮良 (1982) 第1巻。
- 注24 服部 (1932) 第2巻, 第7号, p. 32。
- 注25 服部 (1932) 第2巻, 第8号, p. 14。この点は有坂 (1969, p. 147), 有坂 (1969, p. 466) も注意を喚起している。
- 注26 亀井 (1970), 丸山 (1981) 参照。

参 考 文 献

- 有坂秀世 (1969) 『国語音韻史の研究』増補新版, 三省堂, 東京。
 ——(1969) 『上代音韻攷』, 三省堂, 東京。
- Blair, E. Helen and James A. Robertson (1903-1908) *The Philippine Islands: 1493-1898*. 55 vols. The Arthur H. Clark Co., Cleveland, Ohio, Reprinted 1962. 第15卷所収 Antonio de Morga: Sucesos de las Islas Filipinas (Mexico, 1609) は岩波書店から訳書が刊行された(下記, モルガ参照)。
- 土居重俊 (1958) 『土佐言葉』, 高知市立市民図書館, 高知。
 ——(1962) 『高知県ことば読本』, 高知市立市民図書館, 高知。
 ——(1970) 「高知県における四つ仮名の区別について」, 『高知大学教育学部研究報告』, 第1部, 第22号。
 ——(1974) 「土佐日記と方言」, 『高知大学国文』, 高知大学文学部。
 ——(1979) 『方言談話資料(2)——奈良・高知・長崎——』, 国立国語研究所, 東京。
 ——(1982) 「土佐の方言」, 『高知の研究』6, 清文堂, 大阪。
- 藤原与一 (1974) 『四国三要地方対照記述』, 三弥井書店, 東京。
- 浜田数義 (1982) 「幡多方言について」, 『高知の研究』6, 清文堂, 大阪。
- 橋本進吉 (1950) 『国語音韻の研究』, 岩波書店, 東京。
- 服部四郎 (1931) 「高知方言の発音について」, 『音声学協会会報』, 23号。
 ——(1932) 「琉球語」と「国語」との音韻法則(1)』, 『方言』, 第2巻, 第7号, 春陽堂, 東京。
 ——(1932) 「琉球語」と「国語」との音韻法則(2)』, 『方言』, 第2巻, 第8号, 春陽堂, 東京。
 ——(1957) 『音声学』, 岩波書店, 東京。
 ——(1960) 『言語学の方法』, 岩波書店, 東京。
- 東辻保和 (1981) 「平安時代語と現代土佐方言」, 『方言学論叢 藤原与一先生古稀記念論集Ⅱ』, 三省堂, 東京。
- 岩淵悦太郎 (1930) 「土佐方言」, 『音声学協会会報』, 第19号。
- 亀井 孝 (1970) 「すずめしうしう」, 『成蹊國文』, 成蹊大学文学部。
 ——(1980) 「音韻史」, 『国語学大辞典』, 東京堂, 東京。
- 国語学会 (1980) 『国語学大辞典』, 東京堂, 東京。
- 国立国語研究所 (1967) 『日本言語地図』, 第1巻, 東京。
- 馬淵和夫 (1968) 『上代のことば』, 至文堂, 東京。
- 丸山 徹 (1981) 「中世日本語のサ行子音——ロドリゲスの記述をめぐって——」, 『国語学』, 第124号, 国語学会。
- 宮良當壮 (1980) 『探訪南島語彙稿』, 宮良當壮全集, 第7巻, 第一書房, 東京。
 ——(1982) 『日本方言彙編(1)』, 宮良當壮全集, 第1巻, 第一書房, 東京。
- 宮田直太郎 (1936) 『土佐方言の研究』, 高知県女子師範学校。
- モルガ, アントニオ・デ (1966) 『フィリピン諸島誌』, 岩波書店, 東京。
- 中本正智 (1981) 『日本語の原景』, 金鷄社, 東京。
- 日本放送協会 (1967) 『全国方言資料』, 第5巻, 東京。
- 佐藤仙一郎 (1934) 「土佐方言の音韻」, 『方言』, 第4巻, 第2号, 春陽堂, 東京。
- 柴田 武 (1960) 「高知方言の音声的特徴」, 浜田数義編『幡多方言』, 第10号, 方言研究

(10) 土佐方言サ行子音と上代サ行子音

同好会，高知県立窪川高等学校内，窪川。

——(1962)「語頭の入りわたり鼻音」，浜田数義編『土佐方言』，第3号，方言研究同好会，高知県立窪川高等学校内，窪川。

竹村義一(1977)『土佐日記の地理的研究——土佐国篇——』，笠間書院，東京。

築島裕(1980)「平安時代の国語」，『国語学大辞典』，東京堂，東京。

山田幸宏(1982)中村市古尾方言調査ノート。

——高知大学教授——

(昭和57年10月20日 受理)